

肉体改造エクスタシー ―後編サンプル―

「はい、じゃあ次の子ー……あ、こんにちは。見学？」

「あ、はい、失礼します」

カウンターのうちのそのまた奥のドア。そこには白衣を着た中年の男性が丸椅子に座り、その近くに看護師らしい男性が立っていた。

「ああ、南さん。新しい子ですか」

「今日体験の子なんです。お邪魔しますね」

どうやら南は顔が広いらしい。親しげに話し、邪魔にならない場所に立たせてくれる。

「あの、ここは……？」

小声で尋ねると、どうやら医師にも聞こえたらしい。

「ここはね、まずはおしっこを抜くところ。コーヒーを入れるでしょ？ その前に膀胱の中を空っぽにするの」

「あ、そ、そうなんですか」

まさか医師自ら答えてくれるとは思わなかった。それにしても気さくな人だ。

「おしっこを抜くのは看護師の彼がして、僕はタマタマから精液を抜いて、ミルクを入れてあげるのがお仕事」

すごいでしょ、と言わんばかりの笑顔が可愛らしく、思わず笑いながら頷いてしまった。

「そんなことができるんですね」

言った後で失礼な言い方だったかもしれないと気が付いた。しかし気に障ってはいなかったよ
うで、むしろ嬉しそうに「そうなんだよ！ 難しいんだけどねえ」と笑う。

「先生、次の子入ります」

「ああ、うん、じゃあ、ちよつと見ててね」

まさかここに入職すると思われるくらいどうしよう、と不安がよぎった。しかし、入ってきた
人を見てそんなことは全て吹っ飛んでしまった。

「コータさん！」

「あれ、さっきの！ ここも見学？」

「はい。お邪魔しています」

「そっか」

コータは慣れた様子で看護師の近くにある簡易ベッドに横になった。すかさず看護師が尿道に
カテーテルを入れていく。

「生の後ですね？」

「はい。多分出ないと思うんですけど」

「うーん……あ、ちよつとだけ」

朔のところからも、カテーテルの中に黄色いものが見えた。しかしそれはすぐに止まり、即座に黒い液体の入ったシリンジが添えられ、今度は黒いそれが中に入っていく。

「んっ……あっ」

「熱いですか？」

「いえ……温かい……」

「もう終わりますよ——先生、コーヒーの注入できました」

「はーい。じゃあコータくん、こっちに」

「はい」

コータは下腹部を押さえながらも、歩いて先生の横にある分娩台に座った。ウィーンと軽い音を立て、座面が上がっていく。

「射精は？」

「今日はしてないです」

「ん、オッケ」

話しながら用意されたのは黒色のかなり細いチューブだった。それを先生がススツと尿道内に入れていく。

「あっ……」

「あれ、おしっこ抜くときは声出ないのに」

「こっちは怖いんですよ」

「大丈夫、優しくするから」

「そう言っつていつ……っあ！」

楽しそうに話していたコータの声が止み、体が揺れた。眉間には深い皺が刻まれ、手はぎゅつと握られている。

「うん、苦しいね……」

同情するような、労わるような医師の声に、コータがコクコクと頷いた。

「コータくん、あと少し頑張りましょうね」

そう言ったのは看護師だった。尿の処理が終わったのか、コータの手を握り頭を撫でる。

「ううう……」

「うん、つらいね……でもあとちょっと……よし、じゃあ吸うね。体楽にして、ふー」

「ふー」

医師と看護師が「ふー」と声に出すと、コータは苦しそうにしながらも必死にふーと息を吐いた。

「そう上手……」

ズズズズズズ——

「あああああ！」

嫌な音だった。いかにも吸ってます、という音だ。聞いているだけで鳥肌が立つ。

「あああああああああ！」

「苦しいね、つらいね……はい、ふー」

「ふー」

「ふ、ふっ……ふー……」

見ているだけでつらくなるような時間だった。けれど、実際にはそう長くはない。数秒で音が止むと、コータの呼吸が戻ってくる。

「はあっ……」

「コータくん、よく頑張りましたね」

「ん、じゃあ次はミルク入れるね。力抜いてねー」

「はい……あああああ！」

今度は悲鳴ではなく嬌声だった。でも入れているのは膀胱ではなく精管のはずだし——気持ちいいのだろうか。

「あっ、あっ！」

「コータくん、ふーしてね、ふー」

「ふ、ふー！ ふー！」

ここでも呼吸が大事ならしい。看護師が必死にコータの胸や腕をさすりながら息のタイミングを伝えていく。

「ふー、ふー」

「ふーっ！」

(すごい……)

見ている限りはとてもえっちだ。だって分娩台の上で大きく足を開いて陰部を露出しているのだ。しかも、大事なペニスは医師につままれ、小さな穴にはチューブを咥え込んでいる。

「あ、あっ」

「はい、もう終わるよー」

機械が止まると医師がスルツとチューブを抜いた。それがまた快感のようで、コータが悩ましげな声を上げる。

「あんっ、あっ」

「はい、おしまい！ 頑張ったね」

「はい……ありがとうございます」

あんなにつらそうだったのに、ペニスはもう上を向き始めていた。その中途半端さが逆に生々しい。

~~~~~

「おかえり」

即座に立江が立ち上がりコータに近付く。

「うう……おちんちん……」

「痛い？」

立江の声に、医師がコータに意識を向けたのが分かった。しかしまだ何も言わない。

「ううん……でも苦しい……」

その返事に医師の表情が緩んだ。

「ああ、すぐに楽になろうね」

ベッドに運ばれたコータはすぐに大きく足を開いた。きっと羞恥はないのだろう。「早くう」と甘えた声を出す。

「うん、すぐにちゅばちゅばしようね」

「んっ！ 早くちゅばちゅばしてえ！」

一体何が始まるのだろうか、とつい二人に見入ってしまった。恋人同士のやりとりなんて、見ないふりをするべきなのに。でも、いやらしい雰囲気かなかったのだ。

「あ、まだ先っぽにミルクついてる。上手にミルク出せたんだね」

「ん、出せたあ！ おちんぼからミルク出したからあ！」

だから、早くちゅばちゅばして——立江はパクリとペニスを啜えた。

「あんっ！」

そして亀頭だけを口に含み、言葉通り「ちゅば」と音を立てながら引き抜く。

「あんっ！ あっ、ああっ！」

立江は何度も何度もそれを繰り返した。口に含むのは亀頭だけで、竿の部分はペニスを指でつまんで支えるだけ。唇に力を入れてカチを締め付け、そのまま引き抜きまた啜える。いったばかりではなおさら敏感であろう亀頭だけを、何度も何度も繰り返す。

ちゅばっ！ ちゅばっ！ ちゅぼん！

「ああっ！ あああっ！」

ちゅばっ！ ちゅばっ！

「あ、あ、あ……」

コータの体がかくかくと揺れた。

「あ……だめ、あ、あ、あ……だめ、だめ、だめ、だめ」

その声はおびえているようにも感じられた。しかし立江は動きを止めない。

ちゅばっ！ じゅばっ！ じゅるっ！

「あ……あっ、あっ、ああっ！」

コータは目を見開いていた。きつと与えられる刺激が強すぎ、受け止めきれないのだろう。腰が引け、体が小刻みに震えている。それでも「やめて」とは言わなかった。

じゅぼ、じゅぼ！

「あっ、あっ、あ、あ、あ、あ、だめ、だめ、だめ……ああああ！」

立江が力を溜めるように数拍動きを止めてから力強く引き抜くと、まるで吸い出されたかのようにならぬままから真っ白なものが飛んだ。絶頂とともに体内に残っていたミルクを弾かせたのだ。

「あ……あ……あ……」

「おっと」

ミルクが出なくなると、立江はすぐにまた亀頭だけを咥えた。その瞬間、コータの苦しそうな悲鳴が上がる。

「ああああああああああああああ！」

今度は拒絶していた。立江の額に両手をつけて引きはがそうと暴れている。しかし、立江は鍛え上げられた太い腕でコータの細い腰を掴んで離さない。

「ああああああああああああああ！」

よく見ると、立江の喉が動いていた。コクンコクンと何かを必死に飲み込んでいる。

「あああああ！ ああああああああああ！」

コータの声が濁った。泣いている。精管にチューブを入れられ直接精子を吸い取られても泣かなかったコータが。

~~~~~

トレーニングルームは先ほどよりもさらに人が増えていた。朝よりも午後、夕方の方が混むのだろう。

「では次は……射精は最後にしたいので、腕立て伏せをしましょうか。できますか？ 腕立て伏せ」

「えっと……多分」

自信がなかったのは、スクワットで痛い目を見たからだ。できると思っていたのに、南に言われた通りにしたらほとんどできなかった。だから腕立て伏せも、できる気であると同じことになりそう。

「では最初は膝をつけてやってみましょう」

案内されたところにはフロアマットが敷かれていた。かなり広い。そしてそこには数組の先客の姿があった。

「まずは見学してみましょう」

一番手前で腕立て伏せをしていたのはSコースの男性だった。しかしその下、男性の顔の下に陰部が来る場所で全裸の男の子が仰向けで寝転び、自らのペニスを立てるように支えている。

「あっ……あんっ！ ……あっ……あっ！」

(わ……)

男性は、体を下げる度に男の子のペニスをしゃぶっていた。

「あっ、あっ……」

聞こえてくるじゅぼ、じゅぼ、といういやらしい音。筋力のある男性は安定した動きで上下運動を繰り返して、男の子のペニスの根元から先端までしっかりと口に含み、刺激していた。

「あの、南さん……？」

「フェラチオ、ですわね」

やはりそうだった。こんないやらしいトレーニングなんて——でも、今まで見学・体験してきたものはどれも全てもいやらしかった。だからこれに限ったことではない。けれど、やはりいやらしい。

「あっ、あっ、いつ」

「……疲れたな」

「あっ！ やあっ！」

男の子がいくと言いそうになった途端、男性は動きを止めて膝をついてしまった。そのまま膝立ちになり、筋肉をほぐすように肩を回している。

「やあ……」

男の子はまだ自身のペニスを支えていた。小さなペニスだ。それでも完全に勃起していることが分かるほど、ガチガチだった。

「少し休憩をしようかな」

「や、やだ、お願いしますっ」

「もう腕がつりそうだよ」

それが嘘だというのは朔にも分かった。いや、男の子をいじめるためにわざと分かりやすく言っているのだろう。

「やあ……」

「さあ、次はお尻を鍛えようかな。最近少し肉が垂れてきた気がしてね」

男の子は射精を奪われ、泣きそうな顔になっていた。しかし仕事だからか、渋々体を起こして立ち上がる。

「ご利用ありがとうございます……」

「うん、またあとで来るね」

「はい、お待ちしております……」

なんだか切なくなってしまった。きつとイきたくて仕方ないだろうに、仕事だからとこらえている。つらいだろう。本当は自分で扱いてしまいたいだろう。でもきつと、「またあとで来る」と言われた以上、そうすることはできないのだ。

「朔くん、」

「かわいそうです」

「そうですね。でもそれが仕事です。それにきつと、次はちゃんとイかせてもらえらると思いますよ」

南はそれ以上言及するつもりはないようだった。腰に手を添えられ、歩くように促される。

「奥の二人を見てみましょう」

「はい……」

もしかして南もそういうことをする——のだろう。するとしたらスコースだと言っていたし、朔の体を使ってトレーニングしたいとも言っていた。でもあんな風に放置されたら寂しくて切なくて、きつと泣いてしまうだろう。おちんちん弄つてと南に縋り付いて懇願してしまうかもしれない

ない。

「——どうしました？」

「いえ……南さんにもあんな風に放置されちゃうのかなって思ってた」

「私？ ああ、いえ……そうですね、しない、とは言えないですが放置はしませんよ。トレーニングはインターバルが必要なので、例えば腕の次は腹筋、足腰という風に移っていくんです。朔くんの体をお借りするときほどの部位も全て朔くんに相手をしてもらうつもりでいるので、朔くん自身を放置ということにはなりません」

「でも射精は……」

あんな風に焦らされるのだろうか。

「それは許す日もあれば許さない日もあるでしょう。そのときの気分次第です」

「そんな！」

「でもきつと朔くんも楽しめると——ああ、あちらを見てください」

話を逸らされたと思ったけれど、どうやら男の子がトレーニングを始めるところのようだった。ひとまず今は見学だとそちらに意識を集中させる。

その二人組は壁際にいた。腕立て伏せをする男の子と、その体の下を覗き込んでいるトレーナー。一体何をしているのか、遠目ではよく分からなかった。

「もう少し近くに行ってみましょう」

南は遠慮なくトレーナーのすぐ前——男の子を挟んで——に腰を下ろした。そしてトレーナー同様、男の子の体の下を覗き込む。

「あっ、あっ、あっ」

男の子は腕立て伏せをしながら喘いでいた。どうしたのだろうか。南を俯って腰の辺りを覗き込むと、床の上にはテニスボールサイズの柔らかそうなものがあった。

(あ……これ……！)

それは最初に行った腕を鍛えるところで見えたものだった。確か手首をほぐすなんて言って、亀頭に被せて撫でるように回していた、あれだ。トレーナーは片手でそれを支えている。そして男の子が体を上下させる度、テニスボール大のそれが男の子の亀頭だけを咥え込んだ。

「イけそうでしたらイってしまってもかまいませんよ」

「あっ、あんっ、あっ、むり、むり、むりっ、あっ！ ああっ！ もう、もう無理ですっ！」

男の子の腕が震えていた。でもまだ十回もしていない。きっと亀頭だけを刺激される快感により、体が力が入らないのだろう。

「おちんちんの先っぽ、くちゅくちゅされるの好きでしょう？ もう少し頑張りましょう」

「あああ……！！」

男の子はぶんぶん首を振った。本当にもう無理だと告げたいのだろう。しかしトレーナーは「先っぽ、好きじゃなかったんですか」とわざとらしい声で言った。

~~~~~

「では腕を休ませている間に腰の運動に行きましょう」

使う部位を変えていく——それは南自身もそうしていると行っていたけれど、頭の中は気持ち良くなりたいたいという思いでいっぱいだった。でも気持ち良くなれば何でもいいというのではなく、引き続きペニスを刺激して、射精したい。

案内されたのは腰より少し低い位置にオナホールが設置された器具だった。見るだけで使い方が分かり顔がにやけてしまう。

「朔くんのおちんちんの高さだと……」

こちらに穴を向けたオナホールの前に立ち、高さの調整が終わるのを待つ。

(恥ずかしい……)

もう、今日何度そう思っただろう。勃起をさらし、興奮を見せつけ、射精の許しを乞う。朔自身もしたし、同じようにしている人を何人も見た。

「——朔くん、一度おちんちんを入れてみてください」

「はい」

腕立て伏せでだるくなった腕を上げペニスを挿む。ホールの位置がペニスよりも少し低いので、腰を落として押し込んでみる。唯一疲れを見せないそれは、すでに中に入れられていたローションの力を借りてゆっくりと新しい世界に入っていた。

「ああ……」

熱い息が漏れた。すごい。すごく気持ちいい。

「良さそうですね」

「はい……すごく気持ちいいです」

手するのは全く違う快感。オナホールは今日三度目だけれど、ずしりと重いオナホールとも、亀頭だけしか啞えてくれないオナホールとも感触が違う。

「ではゆっくりと腰を振りましょう。腰を振った経験はありますか」

「ないです」

「では抜けてしまわないようにペニスの長さとおナホールの位置を意識しながらやってみましょう」

呼吸もゆっくりです、よ、という注意に頷き、はやる心を抑えるために深呼吸。

「そう、いいですね。では動きましょう」

「はい……んっあ……」

ねっとりとした膜がからみつくような感触だった。小さな突起がペニスを細かく舐めるような快感。

「そう、上手です。おちんちん気持ちいいですね」

「はいっ、んっ、あっ」

気持ちいい——しかし、太ももが痛い。

「あ、あ……」

息が上がる。痛い。入れたときは何とも思わなかったのに、あっという間に中腰がきつくなっ

てきてしまった。

「うあああー！」

痛い。ふるふるすると震えてくる。しっかりと膝をまっすぐにして足腰を伸ばしたい。しかしペニスは抜きたくない。

「あ、あー！」

痛い苦しい痛い。このままだと転んでしまう、と思ったところで思い切りペニスを引き抜き、かばうように腰に手を添え背中を逸らす。

「つらいですね。でもおちんちん気持ちいいでしょう」

「はい……でも足が……」

体を伸ばせば楽になる。しかし、少しでも中腰に戻すとまたすぐに震え始めてしまう。

「もう一度、次は五回腰を振ってみましょう」

「や、そんな……」

ただのオナニーだったら五回だけなんて、と思ったことだろう。でも今はその五回が苦痛ではない。

「おちんちん、中に入れてあげないとかわいそうですよ」

「あ……」

「ほら、見てください」

南に示されたのは二メートルほど離れたところに設置された台だった。今朝がしていたように、男性が器具の前で腰を振っている。しかし、それは朔が使っているのとは違っていた。オナホールが設置されているのではなく、裸体の男の子が立ちバックの体勢で設置されているのだ。

「あ、あ、ああ……！！」

「ああ……すぐよく締まる。すぐにイってしまいそうですよ」

男性はもったいぶるようにゆっくりと腰を回した。それがどうやら男の子のイイトコロに当たっているようで、ぐるんと腰が動く度に気持ち良さそうな声を上げている。

「ああ、そうだ、腕も一緒に鍛えようと思ってたんだ。筋肉もそうなんだが、リズム感が少し悪くてね」

何が始まるのか——自分でも驚いたけれど——それだけでもう分かってしまった。しかし男の子は何が始まるのか分からないのだろう。「ひい」という声を上げ、お尻を揺らした。

「ほら、好きだろう？」

「あっ！」

男性は男の子のアナルにペニスを挿入したまま、用意してあったらしいオナホールを無防備なペニスに添えた。

「あ、あっ！」

ゆっくり……かなりゆっくりオナホールをはめていく。

「ほら、おちんちんが食べられてくよ」

「あ、だめえ、おちんちん食べちゃだめえ！」

「ん？ どうしてダメなのかな」

「だってえ！ 白いおしっこ出ちゃうからあ……！」

白いおしっこ——精液の呼称ということは分かったけれど、そんな言い方を聞いたのは初めてだった。

「白いおしっこでも黄色いおしっこでも、何でも出してかまわないよ」

「やだあ！ お漏らしやだあ！」

男の子は必死に首を振ったけれど、男性はとても嬉しそうに笑っていた。いじめるのが楽しくてしかたがないのだろう。

「さあ、俺はリズム感も一緒に鍛えられるように頑張るよ」

男性は男の子の「いや」を無視して腰の前後運動を再開させた。

~~~~~

——結局、射精に至ることはできなかった。何度もいく直前まではいけたのだ。しかし、どうしてもあと少しというところで太ももが悲鳴を上げ、断念せざるを得なかった。

「やああ……」

床に崩れ落ち、俯く。ペニスは腫れ上がったように真っ赤で、ローションとカウパーでたらと光り、あとほんの数秒の刺激で射精できるところまでできているのに。

悔しいし、苦しかった。もつと体力があれば、きっと射精できたはずなのに。

「朔くん、部屋に戻りましょうか」

「あ……」

「それとも、もう一度最初にしたオナホールコーナーに戻りますか？」

「あ……重いやつ……ですか」

「はい」

きつと、これは情けだ。今日が初めてだから、体験だから、甘やかしてくれているだけ。だって今日見た他のトレーナーはそんな甘い言葉を吐いていなかった。視線は愛情たっぷりだったのにとっても厳しくて……でも、会員の男の子は一所懸命頑張っていた。頑張って、ちゃんと射精していた。

「……いえ……戻ります」

自分だけが甘やかされるのは嫌だったし、何より腕立て伏せでもう腕に力が入らなくなっていたのだ。重いオナホールでペニスを扱ってイくなんで、到底できそうになかった。

「分かりました。では戻ってシャワーを浴びましょう」

限界でしょう、と言って南はずっと抱き上げてくれた。安定感のある腕。落とされるかもなんて不安は一切生じない。

「……南さん……」

首に腕を回すと、ふわっと南の雰囲気は軽くなった。

「どうしました」

「……すみません」

「え？」

「上手にできませんでした……」

南の本業はトレーナーではないと言っていたけれど、それでも今日の業務がトレーナーであることには変わらない。きつと、会員の様子を見極めながら射精までさせるのが仕事なのだろう、となんとなく思ったのだ。これくらいなら射精できると考えてのトレーニングメニュー。けれど朔はそれをこなすことができなかった。南の期待を裏切ったようなものだ。

「お上手でしたよ。とても頑張りましたね」

「でも射精できませんでした……」

「この目標は射精ではありませんよ」

あてがわれている個室に入ると、南はそのまま浴室に入った。簡素なシャワールームかと思っ
ていたけれど、まるで温泉のように広い浴槽つきで、洗い場にはエアベッドが敷かれていた。そ
こに優しく寝かせてもらいたい、南が裸になるのを待つ。

「おまたせしました」

裸は見られなかった。だって確実に興奮してしまうから。上手にできなくて申し訳ない気持ち
でいっぱいなのに、南の裸体に興奮するなんて——それに、気分が落ちていけるせいかそれほど体
を見たいとも思えなくて。

「さあ、汗を流しましょう。石鹸やシャンプーで肌が荒れたことはありませんか」

「大丈夫です……」

そこまで気にしてもらえるなんて——そこまで気を遣うプロに一日ついてもらったのに、全然
上手にできなかった。

「——朔くん」

背けていた顔を向けると、南は困ったように笑っていた。

「朔くんの射精が見たかったのは本音です。でも、射精できなくて苦しいと訴える朔くんがとて
も可愛くて、途中からは射精させたくないなと思っていました」

（……嘘だ）

それは南の優しい嘘。朔が気に病まないようにという気遣い。

「射精、できなくて苦しいですね」

「はい……」

「きつと帰宅しても今日のことを何度も思い出すでしょう。射精したくて、ペニスを握ろうと思
うでしょう」

「っ……」

みんな、誰だってそうなる。なのに、まるで朔が淫乱だからそうするだろうと言われていた
みたい。

「そのとき、きつと私のことも思い出してくれるでしょう？」

「え……？」

「それは朔くんの部屋、プライベートな場所……例えばベッドの中でも、朔くんの中に私がいるということでしょう」

「あ……」

「もっと私でいっぱいになってください。いつでも私のことを考えていてほしい」

「南さん……」

言われなくてもそうなる。だからこそ、告白されたときに戸惑ったのだ。仕事に集中できなくなるから。でもきつともう手遅れだった。あのとき何も言わなくても——言われなくても、きつと朔の頭の中はずっと南で満たされることになっていったと思う。

「射精しなければ、ずっと射精願望が続くでしょう？ 少なくともその間は私のことを思い出してくれる、と思いました」

(もしかして、本当に……？)

~~~~~

「朔くんの髪は柔らかいですね」

「細いんです。それに少しくせ毛でふわふわしちゃって」

「可愛らしいですよ」

髪の手入れを終えると次は体だった。泡で出てくるタイプのボディソープをたっぷりと手に出し、指先を撫でられる。

「あ、の……？」

「はい」

「手で……ですか」

ボディタオルで「しごとと擦るのではないのか。まさか手で全身洗われるのだろうか。

「はい。きれいな肌に傷がついたら大変ですから。それに朔くんのごことは全て触れて知りたいんです」

ボディタオルで洗う方が確実に早いし楽だ。なのに、南は古傷さえ見逃すまいとするかのように丁寧に肌を撫でていく。

「んっ……」

腕も肩も気持ち良かった。けれど、南の手が先に進むに従ってむずむずが再発してしまい苦しくなる。

「乳首……たくさん弄ってあげる約束でしたね」

「っあー！」

上体を起こされ、背後から抱きしめるように乳首に両手を伸ばされた。くりくりこりこり、すでに硬くなってしまっている乳頭を捏ねられる。

「あっ、あ、あっ」

せつかく射精欲が落ち着いていたのに。乳首を揉まれるとそれだけでペニスは力を持ち直し、焦らされた分を取り戻すようにカウパーを垂らしてしまう。

「あっ、ん、あっ」

気持ちいい。もつとしてほしい。人差し指で乳頭をぐりぐりと回され、指先が離れたと思ったらぐつと乳輪に押し込むように潰されて。ぽこつと形を戻すと、褒めるように先端を擦られる。

「ああっ！ ああっ！ みなみ、さんっ！」

「はい。どうしましたか」

「やあ！ もうっ！ イきたいっ！」

「いけません。今イってしまったら家に帰ってから射精したいと思わないかもしれません」

「やあ！ そんなことっ！」

絶対にない。だってこんなに気持ちいいことをたくさん知ってしまったのだ。他人に触られる快感も、見られる快感も、愛される快感も——どれも、今まで知らなかったこと。

「苦しめてしまっていることは分かっています。でもさっき言ったとおり、今後朔くんの射精は全て私の前でだけ行ってほしいんです」

「あっ、あっ！ ならっ！」

今させて、と言うと乳首を弄る手が止まった。

「あ……なんで……」

乳首が疼く。もつとしてほしい。刺激がなくなって寂しい。つらい。射精したいのでペニスも弄ってほしいけれど、左右どちらの乳首も弄っていてほしい——でも、どこも弄ってもらえない。

「や、南さんっ！」

「すみません……でも、まだ射精してほしくないんです。もつと射精したいと言う朔くんを見ていたい」

「っ……」

本気なのだ。南は本当に射精を望む姿が好きなのだ。

「やあ……」

射精したい。なのにさせてもらえないなんて。

「可愛いです。射精したいんですね？」

「したいっ！ したいですっ！」

素直に認めて頷くと、耳元に「はあ」と熱い息がかかった。

(あ……興奮……してる……?)

今日たくさんいやらしいことをしたけれど、一度だって南の興奮を感じたことはなかった。でも今は、興奮してくれているのかもしれない。

「南さんっ、射精、したいっ」

もつと興奮してほしかった。射精したいと懇願することで南が興奮するのなら、今すぐ射精できなくてもかまわない。

「ああ……朔くん……本当に可愛い……おちんちん、ずっと射精させてもらえなくて苦しいです

ね」

「うう……苦しいです……」

「おちんちん、壊れてしまいませんか」

「やっ……っ！」

南の言葉は、朔に求めている言葉そのものだと思っていた。でも壊れるなんて——もし認めたら、本当に壊れるまで射精を許してもらえなくなってしまうのでは、と怖くなった。

「朔くん、おちんちん、壊れそうになっていませんか」

「あ……あ……」

重ねられた質問。頷いてもいいのだろうか。

「や、南さんっ」

「まだ……大丈夫そうですね」

「っ！ や、ダメ、壊れちゃいますっ！ このままじゃおちんちん壊れちゃうっ！」

壊れるまで焦らされてしまうかもしれない恐怖と、まだ大丈夫と誤解されて焦らされ続けるかもしれない恐怖——どちらも結局イかせてもらえないことは同じなのだけれど、大丈夫と思われる方が怖かった。

「そうですね……朔くんのおちんちんは壊れてしまいそうなんです」

必死に何度も頷いた。もうだめだから、一度でいいからとりあえずイかせてほしいと「ごちゃごちゃの頭で思いつくまま言葉にする。

「やあっ！ おちんちんがっ！」

「可愛い……本当に限界そうですね」

「はいっ！ もうっ……っ！」

腰の辺りに添えられていた手が肌を這った。ゆっくりと上がってきて、勃起したままの乳頭をきゅっつつまむ。

「あっ！」

「ああ……乳首もこんなにして。えっちですね」

「あ、あ……」

乳首で気持ち良くなれると知ったのは今日が初めてだった。なのにもう、立派な性感帯になってしまった。中途半端に弄られるとむずむずするし、弄られている間は体の中を通して快感がペニスに直結しているように感じられる。それくらいとても気持ちがいい。

「気持ちいいですか？」

「あんっ、は、いっ！ きもちっ」

本当はペニスを握ってほしい。でもそれがもらえないのなら乳首だけでも——でも射精欲は高まっていくばかりで苦しくて。

「ああっ！」

きゅっきゅとリズムカルに、潰すようにして揉まれた。血が止まり、またすぐに通いだす。それに合わせて勝手に腹筋にも力が入る。

「あっ、あっ」

「——さあ、では洗うのを続けましょうか」

~~~~~

「……お、オナニーのとき……皮、で、その……」

もうこれ以上は許して、と念じながら言葉を切った。しかし南はあとを引き取ってくれない。じつと黙ったまま、視線で続きを促してくる。

「……皮、で……おちんちん……擦りました……」

初めてのときからそうしていた。皮オナはよくないと話には聞いていたけれど、どうせ一生人に見せることもないしと気にしていなかった。もう長いこと誰かを好きになるようなこともなく、好きになったとしても交際できるなんて夢にも思っていなかったから。だから皮が伸びようと感じ度はどうかなろうとどうでもよかった。ただただ快感を求めただけ。

「そうですか。皮でくちゅくちゅしていたんですね」

「っ……は、い……」

どうしてこうわざわざ恥ずかしい言い方をするのだろうか。しかも全てが朔の興奮を高めていて——まるで、なんと言えば朔の体が悦ぶか知っているかのよう。

「では、皮を剥いてみましょう。朔くんが剥いてみてください」

「え……」

してくれないのだろうか。してほしい——だって、自分でする方が恥ずかしい。

「中のお顔を見せてください。それとも、皮を剥くだけでイってしまいそうですか？」

「や、そんなことは……」

でも、中を南に洗われるのは怖かった。自分で洗う時だって、刺激が強すぎてびくっとしてしまうことがあるのだ。

「あ、あの……その、き、とう、は、ちよつと……」

せめて自分で洗いたい。そう告げると、南は緩く首を振った。

「いけません。ここでは私の仕事ですから。それとも亀頭に触れられるのが怖いんですか」

「……はい。すみません、南さんがどうとかっていうんじゃないかと、敏感で」

誤解しないでほしくて口早に告げると、南は朔の陰部に視線を落とした。じつと、目を細めて見つめられる。

(そんな見ないで……)

隠すために手を伸ばそうとしたとき、南がふつと息を吐いた。

「そうですね。こんな風にずつと守られていたら、中の子は敏感になってしまいますね」

「っ……」

包茎、とわざわざ遠回しに言われたのだとすぐに分かった。

「でもお外に慣れさせてあげましょう」

「あ、や……」

南の手がそそり立つ。ペニスを持った。怖い。剥かれてしまう。

「や、やだ、こわっ」

「怖くありませんよ。まだ亀頭には触れません。見せてください」

「……本当ですか」

「はい。いきなり触ったらおびえさせてしまいそうなので」

「……はい」

「上げかけた手を下ろすと、南がゆっくりと撫でるようにして皮を下ろした。ぬるっとした感触と共に亀頭が露出していく。」

「ああ……」

出てしまった——普通なら出ていくべきなのに、外の世界に不慣れすぎて怖い。

「可愛い……とてもきれいなピンク色ですね。毎日皮で撫でてあげているからでしょうか」

「っ……」

「今度は皮オナだ。遠回しに、でもわざと恥ずかしい言葉を選んで言い聞かされている。」

「今日もよく頑張りましたね」

「じつと、亀頭を見ながらの言葉。今南が褒めているのは朔ではなく亀頭なのだ。ずっと隠れていただけの亀頭。何もしていないのに。頑張ったのは朔なのに。」

「や……」

「朔くん？」

「思わず低い声になってしまったからだろうか。南が不思議そうな顔で朔を見た。」

「亀頭は何も頑張っていないです……」

「ただ隠れて、安全なところから快感を得ていただけだ。確かに射精できず苦しかったけれど、苦しいと感じたのは亀頭ではなく朔の方。」

「南が目を細めた。」

「——朔くん、よく頑張りましたね」

「あ……」

「本当に、とてもよく頑張りました。初めての環境で、みんなに見られながらよく勃起できました。それに、トレーニングもとてもよく頑張りましたね」

「南さん……」

「分かってくれた。朔が、亀頭に嫉妬したのだと分かって、でもそれを馬鹿にすることもなく、求めている言葉をくれた。」

「すごいいいこでした」

「頭を撫でられたら、もうとろけてしまった。もう一度体中撫でてほしい。全身、たくさんその手で愛してほしい。」

「南さん……」

「はい」

「……………」

「朔くん？」

「ここも撫でて……」

勃起を支える南の手に触れると、南は目を瞬かせた。

「朔くん……いいんですか。怖いんでしょう」

でも、驚いた顔は一瞬だった。すぐにふわっと柔らかくなり、嬉しそうに目を細める。

「無理なくていいんですよ」

「……怖いけど……もつと南さんに撫でてほしいです」

本当は体中撫でてほしかったけれど、まだ体を洗い終えていない。それに——お付き合いするのだから、これからいくらだってチャンスはあるだろう。

「分かりました。では、ここも汗をかいていると思うのできれいにしましょうね」

南の手のひらが亀頭の上にかぶさった。やっぱり怖い。ぎゅっと目をつぶり拳を握る。

「あ……」

泡を転がすように手のひらが動いた。まるでテレビコマーシャルで見る「泡で洗う」みたいだ。南の手の感触は全く感じなくて、ふわふわとした泡が亀頭をくすぐるだけ。

「あ、あつ」

気持ちいい。泡の感触もだけれど、なんだかとても大切にされているような気持ちになる。

「痛くありませんか」

「んっ、はいっ、きもちっ、です」

しゅわしゅわ消えていく泡の感触。ゆったりとした手の動き。気持ちいい。でも、普段こんな洗い方はしないので、これで本当にきれいになっているのかが分からず、むずむずする。

(でも力強くされたら怖いし……)

敏感だからと言ったのは朔だ。南はそれを考慮して優しくしてくれているだけだというのに、洗えているか分からないなんて言い方はできない。まあ、家に帰ってからしっかりと洗えばいいのだけれど——自分は甘えたいのだろうか。怖い、優しくしてほしい、でもちゃんと洗ってほしい——全てわがまま。でも、南にそのわがままを言いたかった。

「さあ、これでいいです。きれいになりましたよ」

「あ……」

終わってしまった。でも、やっぱり南にちゃんと洗ってほしくて。いや、洗ってほしいというより、わがままを叶えてほしかったのだ。そうやって南の愛情を感じたかった。

「ん？ どうかしましたか」

「……もつと……」

「え？」

「もつと……強くしてください……」

恥を忍んでのお願い。おねだり。

怖いんでしょう、敏感すぎて擦ったら痛いんでしょう——そう言われるだろうと思ったし、で

もそう言われたらなんと返せばいいかも分からないまま目を閉じていると、突然の刺激が亀頭を襲った。

~~~~~

「さあ、オムツをしましょうね」

「えっ?!」

見せられたのは確かに真っ白なオムツだった。でもどうして急に——質問をする間もなく、南は足元に座ってしまった。

「朔くんは可愛いのでとてもよくお似合いになると思います」

嬉しそうに言われても、どう反応したらいいか分からなかった。だってオムツなんて普通元気な大人が使うものではない。

「さあ、腰を上げましょうね」

そう言われても、戸惑いから体は動かなかった。でもそうなるかと予測していたのか、お尻の下に差し込まれた手がぐっと腰を持ち上げてしまう。

「わっ」

「軽いですね。もう少しウェイトを増やさないと抵抗しても簡単に封じられてしまいますよ」

「……抵抗したくなるようなことするんですか……」

訊いておきながら、心の中では嫌だなんて微塵も思っていなかった。

「抵抗は……そうですね、朔くん次第でしょう。でもオムツはMな子全員がすることですよ」

「え、そうなんですか」

「はい。良質な睡眠をとるためです。寝ている途中で尿意で起きるのは嫌でしょう。もし尿意で起きたにしても、トイレまで行って戻ってくれば目が覚めてしまいます。それを避けるために、ここではオムツをして眠っていただいています」

「徹底しているんですね」

オムツは恥ずかしかったけれど、ようは尿意を感じなければいい話なのだ。幸い、といていいのかが分からないけれど、さっきお漏らしをしてしまったことで尿意は全く感じられないし、まさかこのあと八時間以上の睡眠をとるということもないだろう。仮眠程度なら尿意を気にすることすらないはずだ。

「ちくちくしませんか」

「大丈夫です」

南は慣れた手つきでオムツをあてた。テープタイプのように、きつすぎないかを確認してくれている。

「では、途中尿意や便意があればそのままオムツに出してくださいね。基本的に帰宅時間の指定があるときを除いて、規定の時間眠っていただくこととなります。もし途中で起きてしまっても、そのままベッドから降りずに体を休めていただくことになっておりますので」

「分かりました。ちなみに何時までなんですか」

今の時間は夕方四時。夕食も言っていたので、寝るのはせいぜい二時間か三時間程度だろう。「夕食は十九時を予定しているのですが、普段の朔くんの生活ペースに合わせた方がいいでしょうか」

もうオムツは終わったはずなのに、なかなか南は隣に来てくれなかった。早くぎゅっとしてほしい。昨日まではハグされた経験もなかったというのに、もうすっかり南の体温がないと安心できない体になってしまっていた。

「いえ、何時でも大丈夫です」

「分かりました。明日の仕事は……」

「十時頃家を出ます」

「分かりました」

南が再びベッドから降りた。でも今度は遠くまで行くようなことはなく、朔の場所からは死角になっていたベッドわきの冷蔵庫を開けた。

「では寝る前の水分補給をいたしましょう」

「……え」

見せられたのは哺乳瓶だった。赤ちゃんが使うような、小さなもの。

「出やすいタイプなので、初めてでもちゃんと飲むことができますよ」

オムツというだけで戸惑ったのに……オムツに比べたらマシなのだろうか。いや、どちらも衝撃は大きい。

「さあどうぞ」

首の後ろに腕を差し込まれ、軽々と上体を起こされる。でも自分で座らされるのではなく、まるで本当の赤ちゃんを抱えるようにそのまま支えられ続けて。

(すごい……)

ドキッとしてしまった。だってこんなに軽々と支えられるなんて。

(かっこいい……)

どうしよう。かっこよすぎてぞくぞくする。

基本的にはずーっとこんな感じのエロです。

全編におけるタグ

腸内洗浄・視姦・オナニー、オナホール、強制絶頂、焦らし、羞恥、潮吹き、言葉責め・おむつ・サーバー飲尿・ディルドストックワット・精液吸引・性給仕・亀頭責め・失禁・視姦・焦らし・射精管理

肉体改造エクスタシー —後編サンプル—

goneone (ア)ーわんわん)

2020/12/12

メール: [gooneonegooneone@gmail.com](mailto:gooneonegooneone@gmail.com)

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: gooneone

